一人の人として、最後まで尊厳ある暮らしを

共に支え合い、認知症の方本人が納得できるケアを実現

■NHK主催認知症フォーラムにて

武田純子氏は、1970年に釧路赤十字高等看護学院を卒業後、道内の病院にて、さまざまな医療の現場を経験。看護師として成長していった。

1996年、看護師長を務めていた老人保健施設で、武田氏に転機が訪れる。グループホームの開設に携わると、画一的なケアが高齢者の生きる力を奪っているのではないかという疑問に直面。ノーマライゼーションという概念の提唱者であるニィリエが生まれた国で、グループホームが初めてできたという歴史を持つスウェーデンに渡り、認知症ケアを学ぶこととなった。帰国後武田氏は、2000年に「認知症グループホーム福寿荘」を札幌市に開設。重度認知症の患者さんへの支援を中心に、家族への支援、地域への貢献、介護職の後進育成、雇用機会の拡充を図った。

武田氏は、特に進行が早く、仕事や生活に支障をきたす若年性、幻視、パーキンソン病運動障害などを特徴とするレビー小体型認知症、言語障害や刺激に対する反応や欲求に対する抑制がきかない前頭側頭型認知症の患者さんへの支援など、「認知症の疾患に基づくケア」を早い段階から実践してきた。また、人生の最後までグループホームで生活したいという入居者の希望に沿い、医療機関との連携と看護の力により、これまでに71名の看取りを実施している。武田氏が重んじているのは「入居者が歩んできた人生の歴史」であり、本来の力を引き出しながら、その人らしい生活を構築することである。入居生活のどこに不便や不都合が生じているのかをアセスメントしたうえで、少しでも負担を低減しケアを行う。例えば、人生の最後まで「食べる」ために、食事介助が必要な場合でも、自力で食べている気持ちになるようお箸を持たせる。あるいは、食感や飲み込みやすさなどにも工夫を重ね、入居者の体力や生活リズムに合わせた食事を提供するなど、「同じ人間」として生活するように心がけることが大事なのだと言う。

北海道グループホーム協議会顧問、レビー小体型認知症サポートネットワーク札幌代表、日本認知症ケア学会代議員などを務め、認知症ケアの向上に尽力するとともに、北海道医療大学が行った「認知症の原因疾患および重症度による摂食・咀嚼・嚥下障害の特徴とケアスキルの開発」における筆頭研究協力者として、2014年から5年間データ提供に協力するなど、研究分野においても積極的に関与し、認知症ケアの確立に貢献。2015年には武田氏の取り組みに密着したドキュメンタリー映画「ゆめのほとり―認知症グループホーム福寿荘―」も公開された。映画の撮影という普段とは異なる状況下でも、自然体で生活する入居者の姿は日頃から不安や不満がなく、自由に伸び伸びと笑顔で生活を送れているという何よりの証である。

「人を大切に」「支え合う心」「安心して暮らせる社会づくり」をモットーとする、認知症ケアの実践、教育のパイオニアとしての武田氏の活動は、これからも日本社会において大切な役割を果たしていくことだろう。

■認知症介護指導者の会設立10周年でスピーチ

武田（たけだ）　純子（じゅんこ）
Junko Takeda

有限会社ライフアート　会長
グループホーム福寿荘　総合施設長

Chairman, Life Art Co. Ltd
Facility Director,
Group Home Fukujusou

1970年釧路赤十字高等看護学院卒業。釧路赤十字病院にて看護師としてキャリアをスタート。その後、道立釧路病院、札幌しらかば台病院で看護管理業務に従事し、1996年に日本看護協会の保健推進モデル事業を受託。2000年に認知症グループホーム福寿荘を開設。後にドキュメンタリー映画でも紹介された同施設は、重度認知症を抱える高齢者とその家族への支援および地域への貢献と、介護職の人材育成によって地域の介護医療発展の一翼を担う。その他、北海道グループホーム協議会やレビー小体型認知症サポートネットワーク北海道、認知症ケア学会にて役員や議員を歴任し、認知症ケアの品質向上とケア方法の確立に向け精力的に活動している。

推薦者

坂本　すが
東京医療保健大学　副学長

久常　節子
元社団法人日本看護協会　会長